

～ 日本看護系学会協議会連携事業 ～  
公益社団法人日本看護科学学会 平成26年度 災害看護支援事業

## 事業完了報告書

「在宅におけるケアの有用性を高める」  
ための人材育成の取り組み

所属機関： 健和会臨床看護学研究所

代表者名： 川嶋 みどり

## ■ 事業内容

事業の内容、手法、場所、対象者とその人数などを具体的に記載すること。

地域包括ケアを視野に入れた在宅ケアの強化は、時代の要請であるとともに被災地住民のニーズでもあり、それに携わる人材育成が課題である。本事業では、地域包括ケアを視野に入れた在宅における看護技術水準を高めるために、被災地の看護職を対象とした研修会「て・あーて塾東北版」を開催した。この研修は、本協会が東京で実施した「て・あーて塾」をモデルにしたもので、理論と身体ツールを用いた技術を組み合わせた研修である。

### 1. 研修会の開催

1) 研修プログラムは表 1(次頁)の通りで、2014 年 7 月から翌年 1 月まで 7 日間開催した。1 日は 6 時間とし、2 日連続で開催した時もあった。講義だけでなく、実技演習、自己の振り返りの討論などを含め多彩な内容とした。

2) 当初の予定講師と日程調整ができず、外部講師は 2 名(山口氏、今野氏)で、主に本協会関係者が講師となった。講師は 1 名を除いて関東在住者である。

3) 研修の案内は、東北三県や石巻医療圏の看護管理者を始め、当協会が過去に開催した企画の参加者へ郵送した。その結果、参加者は、石巻医療圏からが大半を占め、県内の仙台市、白石市、塩釜市から、また中には HP を見て、千葉から参加したものもいた。参加者は主に上司の勧めがきっかけとなっており、ほとんどが自分の時間を使っての参加であった。

4) 開催場所は、本法人の拠点、「て・あーて東松島の家」(東松島市)で駅からの便が悪いこともあって、参加者はほとんど自家用車で通っていた。

5) 全コースの申込者は 20 名であったが、全日程参加したのは 6 名に留まった。だが、I ~ V のコース別参加者が毎回 5 名あり、最終的な参加者の述べ人数は 145 名であった。欠席理由は、他の研修会への参加が最も多く、勤務、家庭の事情等であった。

参加者の働く場は、急性期や亜急性期、療養病棟、回復期リハ病棟、外来、人材育成部門等の病院群や、訪問看護、診療所、さらには行政分野からと様々であった。ほとんど看護師であったが、准看護師も若干名いた。年代は 20 歳代から 60 歳代、経験年数は 7 年から 39 年と幅広い層であった。

6) 研修の評価は、開始時、終了時のアンケート調査や研修で発言された意見や感想、提出されたレポート等を参考にした。

### 2. 研修会の準備、評価会議の開催

研修参加者募集から研修開始までの事前準備、研修開始後は、当日の運営、参加者の評価、講師の意見等を毎月理事会で報告し、運営方法や次回の研修に向けての評価を行った。

理事会開催日: 7/14、8/5、9/10、10/1、11/5、12/22、1/20、2/9)

表 1. 「て・あーて塾東北版」研修プログラムと参加人数

コース	月日	テーマ	講師(所属)	内容	参加数(人)
I	7/26 (土)	て・あーて-その心とわざ- 安楽性概論と生活行動援助論	川嶋みどり (て・あーて推進協会代表理事)	看護の原点となるて・あーての考え方、臨床でどのように取り組んでいくか(安楽性を根拠にした生活行動援助への適用)	20
II	8/2 (土)	①触れる・癒す・あいだをつなぐ手-タッピングタッチ	八木美智子(て・あーて推進協会理事)	タッピングタッチの理論と実技演習(触れる、触れられる体験を重視した演習)	25
		②がん緩和ケアに活かすて・あーて	小野寺綾子(て・あーて推進協会理事)	豊富な実践例から、がん末期患者へのケアについて、その基本になる者を考える	
III	8/3 (日)	認知症高齢者の言葉を聴く力	水野 陽子(て・あーて推進協会理事)	認知症の捉え方、周辺症状への対応、ニーズを把握することの重要性について	22
IV	9/27 (土)	タッチングの技術-看護に活かすフットケア	今野 康子(日本赤十字医療センター糖尿病看護認定看護師)	糖尿病足病変のみかた、アセスメント、爪切りも含めたフットケアの演習	22
V	9/28 (日)	①タッチングの技術-看護に活かすハンドケア	板橋 由紀(て・あーて推進協会)	リンパの流れを改善するハンドマッサージの講義と演習	21
		②討論:学びをどのように現場に活かすか	て・あーて推進協会理事	前半の講義の感想や現状の課題、これから取り組んでいくことについて意見交換	
VI	11/15 (土)	癒しに活かす手の力-理論編 ※公開講座	山口 創 (桜美林大学リベラルアーツ学群)	触れることで、触れられる側、触れる側の身体にはどのような変化が起きているのか、生理学的に検証されている事柄について	25
VII	2015 1/17 (土)	①“て・あーて”の創造・実践・普及	川嶋みどり	て・あーての実践・普及につながる技術論の講義と意見交換	10
		②成果の共有・まとめの討論 ・修了書授与	て・あーて推進協会理事	学んだこと、現場での課題についての意見交換	

## ■ 事業成果

できるだけ具体的に記載すること。

### 1. 研修会企画についての評価

#### 1)参加者の評価

##### (1)研修会に関する満足度について

終了時アンケートに回答があった14名中12名が非常に満足、2名がどちらかと言えば満足であり、高評価であった。その理由は、①看護について振り返るだけでなく、看護の原点に立ち戻りさらに学びを深めることができた、②日々の実践に活かせる内容だった、③自身が元気になった等があった。また、全てに参加できなかったことが残念だった、また頑張ろうと思ったとの前向きな意見も聞かれた。

研修担当者や講師が、休憩時間や終了後に、日常のことや困ったことの相談を受けてくれたとの声もあり、講義以外の時間でも満足しているようであった。

##### (2)参加費用免除について

今回の研修会は支援事業の為、参加費は無料としたが、そうでなくとも参加したか尋ねたところ、全員が参加したと答えていた。その理由は、講師陣が魅力的、今までの研修会に無い内容、実践に活かせる内容、現場で活用できる等がであった。

##### (3)被災地での開催について

現地での開催であることが参加のきっかけになった、地元には有名な講師がきてくれたことに感謝するとの言葉もあった。また、同じ医療圏の参加者たちは、他施設の看護職と交流ができてよかったと答えていた。一方、通うことが大変だったとの声もあり、宮城県は広大であり、公共交通機関が未だ全面復旧していないことも影響していると考えられた。

##### (4)開催時期について

参加者たちは、震災後約1年から3年くらいから学びたいと思うようになったと答えていた。その理由は、①仕事や家庭的な環境が落ち着いた、②学びにいける環境(交通手段も含め)が整ってきた、③気持ちに少し余裕が持てるようになった等があった。

直後から看護の力が大切だからと学びたい気持ちを持ち続けていた者、被災して1週間後の避難所の現状からナイチンゲール看護覚え書を読みなおしたと答えた者がいた。そして、日々の業務の中で精神的に病んでいる人が多くなったと感じていた、看護協会主催の研修会で震災後の心のケアの大きさを学んだ、看護師として自己のありように悩んでいたという状況下で、今回の研修会の案内は学びたい思いを引き出すきっかけとなったようだ。

##### (5)参加者の変化

参加者たちは、研修を通して学んだことをそれぞれの現場で取り組み始めていた。

人材育成を担当している看護師は、自らが講師を務めた講演会で、「災害であろうが無かろうが看護師として必要なこととして、て・あ一ての大切さを伝えた」と、今までよりも看護への思いを伝えたと報告していた。一般病棟で勤務する看護師は、学んだ技術(モーニングケア、タッピングタッチ、認知症患者の対応、傾聴)をチームに拡げていき、患者の笑顔や口数が増える等の変化に喜びを感じ継続していこうと決心をしたと語っていた。また、急性期病棟で手術を受けることを悩んでいる患者との対応に苦慮していた看護師は、タッピングや傾聴に努め、患者から笑顔で「頑張る」と言われたとの体験を報告していた。

全ての参加者が結果を出しているわけではないが、参加者の意見から、それぞれの現場を見直す機会になったと考えられる。

#### 2)主催者側の評価

##### (1)主旨について

本研修会は、地域包括ケアを視野に入れて在宅ケアの強化に資するため、看護技術水準を高めるといふ本事業の主旨に基づく研修であったが、参加者の殆どが、医療施設で働く看護師であったため、在宅に特化した技術研修とはならなかった。しかし、参加者の満足度の高さから見て、

被災により学ぶ環境や機会の減少に配慮のものであったと評価でき、将来、在宅にシフトした場合にも活用されると思われる。

#### (2)プログラム、期間について

看護の原点となる「て・あーて」の理論から、日頃の実践に活用できる看護技術まで、参加者の日々の看護実践の振り返りに有用なものであったと考える。自らも被災し、多くの人々の生命の危機に直面し、さまざまな喪失体験をした看護職だからこそ、改めて看護の原点を学び、職場の現状を振り返る機会になったようである。参加者の中には、発災後「看護覚え書」を読み返した、心のケアが必要と考えていたというように、日々の拠り所となる考え方や方法を求めていたことが推察された。また、実技を取り入れた研修では、「何時もケアを提供する身であるのに、タッピングタッチを受けて心身が軽くなった」とか、「実際に手で触れることの大切さを体験した」「改めて手の力を感じたので現場で活用したい」などの積極的な感想が語られている。このことは、即実践に通じる技法へのニーズの高さを示しているようである。

一方、講義を聞くだけにとどめず、意識化して実践に繋げられるように課題を提示したが、報告者は少なかった。今後の課題である。この点に関して、講義担当者の1人は、指名すれば答えるが、自発的な意見がなかなか出なかったと、やや積極性に欠ける印象を語っている。

開催日は7日間であったが、全ての開催日を通して参加した者が予定より少なかったのは、開催期間が長期にわたったことも影響していると思われる。現場でのフィードバックを予期したプログラムを考慮して月1回にしたが、間隔が遠のいてかえってモチベーションの維持が難しかったと考えられる。一方、コース別での参加者が毎回複数存在したことは、集中した企画のほうが適切かも知れないという課題を残した。検討して今後活かしたい。

#### (3)参加費免除について

当初の計画では、首都圏で実施した企画よりも少ない参加費を徴収する予定であった。それは、被災地域では財政的に困難で、参加者が少なくなるのではないかと懸念したからである。しかし、助成事業として位置付けて、資料代のみ徴収としたが、参加者らの意見では、参加費徴収は参加の有無に関係ないとのことで、予想外の結果であった。今後、仕事や住居が落ち着いた時期になれば、参加費の考慮は不要と言える。

#### (4)被災地での開催について

研修担当者や講師は、対象が被災者であることで、被災支援の意味を強く感じて、「少しでも応援したい、頑張ってもらいたい」という思いを共通して持っていた。地元での開催であり、参加費が免除になったことにより、もっと多くの参加者を期待したが、実際は半数ほどに留まった。それに影響していると考えられるのは、アナウンス方法についてである。石巻医療圏の看護管理者には、研修案内を直接手渡せたが、他は郵送での案内であったことが、反省点としてあげられる。

## 2. 被災地で研修会を開催した意義

今回の被災地で取り組んだ研修は、施設等の復旧の遅れ等から学習の機会を増やすことへの意義を感じて行った。被災後学習の機会が少ない看護職の学びの場になったことは間違いない。この7ヶ月間に、少しずつではあるが、研修で学んだ個人が、よりよい看護実践を行い、後輩へ、そしてチームへと知識と技術を伝えているようである。参加者の大半は石巻医療圏の看護職であったことは、この地域のネットワークを拓ける芽となり、今後拓がっていくものと考えられる。これらことから、本事業は、今後の石巻医療圏の看護技術水準を高めるための人材育成に寄与できたと考えられる。